

どろろ

2006(平成18)年11月29日鑑賞(東宝試写室)

☆☆☆



監督=塩田明彦/アクション監督=程小東チン・シウトン/原作=手塚治虫『どろろ』/出演=妻夫木聡/柴咲コウ/中井貴一/原田芳雄/中村嘉律雄/瑛太/杉本哲太/麻生久美子/土屋アンナ/劇団ひとり/原田美枝子(東宝配給/2006年日本映画/138分)

……1967年連載開始の手塚マンガが、今妻夫木聡と柴咲コウの若手最高のコンビによって映画化! 『十戒』(57年)とよく似た出生の秘密(?)を持つ百鬼丸と、戦乱の世の統一を願うため魔物との契約も辞さない父との確執がテーマだが、魔物(怪獣?)との闘いには、『HERO(英雄)』『LOVERS(十面埋伏)』のアクション監督チン・シウトン、程小東の尽力が大……。製作費20億円を投じた巨大エンタテインメント作品だが、さて『HERO(英雄)』や『PROMISE』と同じような大ヒットが実現するだろうか……?

原作は私の大学時代の手塚マンガ!

『鉄腕アトム』を代表とする「マンガの神様」手塚治虫が38歳の時、すなわち、1967年8月から『少年サンデー』に連載を始めたのが『どろろ』。それはちょうど私が大学に入学した年であり、学園闘争真っ盛りの時代。当時学生運動に励んでいる学生の必読マンガの1つが、「階級闘争」の視点を明確にした白土三平の『カムイ伝』。『どろろ』はその当時特に私の目には留まらなかったが、プレスシートによると「自己発見と階級闘争という深刻なテーマを折り込みながら、従来のヒーローものとは一線を画す内容として大きな反響を呼んだ」とのこと。

戦国時代から神話の世界へ

原作『どろろ』の時代設定は戦国時代。乱世の覇者となるため、魔物との契約も厭わない武将、醍醐景光(中井貴一)は四十八体の魔物を封印する地獄堂で、

わが子の四十八体を魔物に捧げる代わりに、その見返りとして絶大なる力を手に入れる契約を締結した。それから20年の年月が流れ、醍醐の天下統一は後一步のところまで来ていたが、ここに1人の不気味な主人公、百鬼丸（妻夫木聡）が登場する。彼こそが魔物に、目、耳、口、手、足はおろか、五臓六腑に至るまでありとあらゆる体の部位を奪われ、悲運の子として生まれた子の成長した姿だ。そしてもう1人の主人公が、戦乱の世で両親を殺され、今は野盗となり男として生きているどろろ（柴咲コウ）。こんな百鬼丸やどろろの姿をスクリーン上でイキイキと描くためには戦国時代は不向き、そう判断した塩田明彦監督は原作の時代設定を大胆にもはるかにしえかもしくは遠い未来か、さだかでない神話の時代に変えてしまった。そして、百鬼丸が自分の四十八体の肉体の部位を取り戻すために、ヤシガニ、大山椒魚、桜魔人、カラス天狗等の魔物と闘うCGをふんだんに使ったシーンがある意味でこの映画の売りに……。

脇を固める役者たちも豪華！

若手 No.1 の妻夫木聡・柴咲コウのコンビを脇で固める役者たちも豪華。最初に見につくのが、冒頭に物語のテーマを設定するうえで大きな役割を果たす中井貴一。それに続いて重要な役を演ずるのが、タライに乗って川から流れてきた手足のない化け物のような子供を拾い、秘術の限りを尽くしてそれに仮の肉体を与え、その成長を見守った呪医師の寿海（原田芳雄）。この医学的再生物語（？）はかなりマンガ的だが、物語の構成上重要な役柄。また、妖刀・百鬼丸を手にした琵琶法師（中村嘉葎雄）は、その刀を百鬼丸の左腕に引き渡した後も百鬼丸の素性をどろろに説明するなど、映画全般にわたって語り部として大きな役割を……。

また、醍醐の妻百合（原田美枝子）や醍醐の嫡男多宝丸（瑛太）も、映画後半から重要な役柄を……。さらに、平安絵巻に登場するような（？）妖怪の役を演ずるのが土屋アンナであり、その美貌にとらわれの身となっている鯖目（杉本哲太）の奥方として登場。このように、脇役陣の豪華さもこの映画の売りの1つ……。

柴咲コウの頑張りに拍手！

この映画では、女だてらに男の服装をし、野盗として前向きに生きているどろ

ろに扮する柴咲コウが元気いっぱい面白い。ただ、百鬼丸とどろろの出会いをどのように設定するのか、またどろろがなぜ百鬼丸と行動を共にし、協力し合うようになっていくのかについての、動機づけには少し苦勞したよう……。映画では、百鬼丸の左腕に入っている妖刀の力を目の当たりにしたどろろが、どうしてもその妖刀を手に入れたいために百鬼丸についていくという構成にしているが、それだけでは少し動機が不十分。もう少し何らかの工夫がほしいと思ったのは私だけ……。もっとも、美人顔を封印して汚れ役に徹し、汚いセリフを連発する役を元気いっぱいに演じている柴咲コウには拍手を送りたい。とりわけ、百鬼丸が左腕の妖刀で魔物たちを斬り倒し、魔物が爆発する瞬間、顔一面にその返り血(?)を浴びるシーンが1度ならず2度、3度……。本当はこんな役はやりたくないところだろうが……。

20億円の使い途は……？

興行収入10億円をあげれば大ヒットと言える映画界において、『どろろ』の総製作費は20億円！ 来年3月に公開される『蒼き狼 地果て海尽きるまで』は全編モンゴルロケを敢行し、構想27年、総製作費は30億円と言われているが、『どろろ』でその3分の2の費用がかかったのは、ニュージーランドでの大がかりなロケ敢行によるものらしい。『ラスト・サムライ』(03年)もそうだったし、『ロード・オブ・ザ・リング』や『ナルニア国物語』のロケ地もニュージーランドだったが、それは広大な土地と青い空がその舞台に最適だから。

そのポイントは醍醐領の国境にある「番門」で、スクリーン上に再三登場するが、実はこれはとりたてて豪華なセットではない。他方、冒頭シーンに登場する「地獄堂」や百鬼丸が寿海と共に過ごす「寿海の家」もニュージーランドに建築されたとのことだし、「寿海の家」の炎上シーンもかなり派手にやっただけだが、これとても何億円もかかるものではない。また、奇妙な形をした醍醐の城は遠くから望むだけだったから、これは明らかにCG……？

他方、甲冑に身を固めたたくさんの兵士も登場するが、残念ながら『ラスト・サムライ』のような軍団同士の激突シーンはないし、『ロード・オブ・ザ・リング』のような人間集団と怪物集団との激突シーンもなし。すると、20億円の製作

費の使い途は……？

アクションシーンは……？

前述のように、この映画の売りの1つは百鬼丸が各種の魔物（怪獣？）と闘うアクションシーン。したがって、多額の製作費はこのアクションシーンに使われたのかも……？ 第1ラウンド（？）の巨大なヤシガニと闘うシーンには度肝を抜かれたが、こういうシーンは馴れてくると観ていて少しずつバカバカしくなってくる面も……？ こんな派手だが多少バカバカしい闘いのシーンを観ながら思い出したのが、あの張藝謀監督の『HERO（英雄）』（02年）、『LOVERS（十面埋伏）』（04年）や陳凱歌監督の『PROMISE』（05年）で描かれた世界。そして、エンドロールを見て驚いたのは、程小東チン・シウトンという字があったこと。それもそのはず、この映画のアクション監督は『HERO（英雄）』『LOVERS（十面埋伏）』を担当した程小東チン・シウトンだったのだ。したがって、『PROMISE』の神話的世界があまり好きでない私には、この手のCGアクションに抵抗感があったのは当然……。

階級闘争よりも父と子の確執……

白土三平の『カムイ伝』は支配階級 vs. 被支配階級の階級闘争の視点が明確だったが、『どろろ』にはその視点はなく、そのテーマは父と子の確執。手足や目耳口だけではなく、心臓をはじめとする五臓六腑までその四十八体を魔物に売り渡されて生まれてきた化け物のような赤ん坊が、青年となって今生きているのは寿海の秘術のおかげだが、彼は魔物たちと闘ってその部位をひとつずつ取り戻していかなければならない立場。そんな旅を続けている百鬼丸が、自分の父がああ醜態景光であると知った時、一体どう対応すればいいのだろうか……？ また、本来百鬼丸につけられるべき多宝丸という名をつけられた百鬼丸の弟多宝丸にしても、いきなりそんな人物が登場してくれば頭が混乱するのは当然。さあそこで多宝丸が百鬼丸に対してとった行動とは……？

他方、母の子に対する愛は絶対的なもの。夫の命令に逆らってまでわが子を殺す道を選ばず、タライにのせて捨ててしまった百合が、20年ぶりにその子に再会した時にとった行動とは……？

🎬 状況設定の半分は、モーゼの『十戒』と同じ……

ゆりかごに乗せられて川を流れてくる赤ん坊。王女がそれを拾い育て、今は立派に成長したのが青年A。王の下にはAと兄弟のように育てられた実の子Bがいた。ある日青年Aは自分がヘブライ人であることを知ったため、王の元を離れ、青年Bと決定的に対立することに……。こんな物語が『十戒』（57年）であり、青年Bがユル・プリンナー扮するラメシス、そして青年Aがチャールトン・ヘストン扮するモーゼだった。『どろろ』は赤ん坊を川に流すのは同じだが、『十戒』の逆で、王となるべき醍醐景光の妻百合が自分の子供をタライに乗せて川に流し、それを拾った寿海がこれを立派な（？）一人前の青年百鬼丸に育てるもの。そして、ある日百鬼丸は実の弟多宝丸と運命の出会いをすることに……。弟の案内で城内に入った百鬼丸を見た百合が、百鬼丸の着ている着物の模様を見て自分の子であると気づくのは『十戒』とほぼ同じ。そして、その後兄弟が対立し、多宝丸が百鬼丸を殺そうとする流れも『十戒』と同じ。

しかして、『十戒』では海が割れてモーゼ率いるユダヤの民は無事エジプトを脱出できたが、さて百鬼丸の運命はいかに……？

🎬 『PROMISE』 vs. 『どろろ』 の勝敗は……？

『どろろ』は「アジア発、世界へ！」と大宣伝されているが、それはアクション監督に程小東チン・シウトンを起用したことだけではなく、『どろろ』の幻想的な世界観をキープするため、あえてどの国のどの時代の物語と特定せず、アジア的なテイストを強調しているため。このように、最近はやりの日・中・韓・台湾・香港の合作映画と同じように、アジア色をやけに強調しているが、それとよく似た雰囲気チェン・カイコーの映画が陳凱歌監督の『PROMISE』だった。『HERO（英雄）』や『LOVERS（十面埋伏）』は色彩感やアクションはよく似ているものの、それぞれの時代設定は明確にされていたのに対し、『PROMISE』はその点があいまいで、神話的世界を強調したものだった。そして、『PROMISE』は私の好みには全然マッチしなかったが、かなりの大ヒット。さて、『どろろ』はこの『PROMISE』とどこまで勝負できるだろうか……？

2006(平成18)年12月1日記